

2008年度 第86回 関西学生サッカーリーグ（第10節）

6/14（土） 大阪長居第2陸上競技場

第1試合 京産大 vs 立命大

前期リーグが再開し、立命大（7位）と京産大（最下位）という京都勢同士が対戦した。中断期間に行われた関西選手権では立命大が2回戦、京産大が1回戦で敗退し長い調整期間を経た試合となった。その敗戦以来3週間、猛烈な走りこみを行い、堅い守備からのカウンターの徹底を狙う京産大は、相手DFラインの背後へのロングボールが目立つ。一方、立命大も持ち前のパスワークで攻めるが、アタッキングサードでスピードアップ時にミスが生じてしまう。そして立命大がやや押し気味だった38分、MF⑩金本竜市のパスでオフサイドラインぎりぎりを抜け出したFW⑪木付雄大の今季初ゴールで京産大が先制する。

追う立命大は京産大の粘り強い守備にクロス、シュートの精度を欠き、同点は遠い。京産大もカウンターから木付や途中出場のFW⑩宮脇雄嗣がチャンスをつかむが追加点とはできない。迎えた79分、立命大には幸運なPKの判定。しかしMF⑩山口卓也がこれを失敗。残り時間を耐え切った京産大は第2節びわこ大戦以来の2勝目。「久々にうちらしいゲーム。ポランチに食いついてボールを出させなかったのがよかった」と京産大・古井監督はしっかり手ごたえをつかんだようだ。

（文：サッカーライター 貞永 晃二）

京産大 1 $\begin{Bmatrix} 1-0 \\ 0-0 \end{Bmatrix}$ 0 立命大

得点（アシスト）者
38分 ⑪木付（⑩金本）

第2試合 びわこ大 vs 阪南大

びわこ大 1 $\begin{Bmatrix} 0-3 \\ 1-1 \end{Bmatrix}$ 4 阪南大

得点（アシスト）者	得点（アシスト）者
81分 ⑩山田（24 阪南）	1分 ⑧中濱（⑦小寺）
	14分 ⑦小寺
	44分 ③野田（⑦小寺）
	56分 ⑪木原（⑦小寺）

同勝ち点で並ぶ首位（びわこ大）と2位（阪南大）が激突する注目の一戦を迎えた。中断期間の関西選手権では、びわこ大の思わぬ1回戦敗退に対して、阪南大はリーグ6連勝の勢いで久々の優勝と対照的な結果だった。

試合はキックオフ直後、CKをMF⑧中濱雅之が巧みなヘッドを決め先制した阪南大が、14分のMF⑦小寺優輝の追加点でリードを広げびわこ大を圧倒する。松田監督の早い選手交代で追撃したいびわこ大だが、阪南大の2トップ⑬西田剛、⑪木原正和の奔放な動きとMF陣の飛び出しに翻弄され守勢に回ったまま。阪南大はさらにロスタイムにSB③野田紘史がゴールし、3-0と大差で折り返した。

後半11分にも相手ミスから木原が抜け目なく得点した阪南大は、前線、中盤、最終ラインが連動した守備でびわこ大の攻め手をことごとくつぶし、終盤にFKの流れからDF⑩山田尚幸の1点を許したものの、4-1と完勝し、首位に立った。阪南大・須佐徹太郎監督は「びわこ大がゆるいつなぎだったのでもそこにつけ込めた。5、6点行かない」と振り返り、びわこ大・松田保監督は「ここまで恐いもの知らずで来ただけ。前半0-0で終わらないと勝負できない」と苦々しげだった。

（文：サッカーライター 貞永 晃二）

6/14（土） 高槻市立萩谷総合公園サッカー場

第1試合 姫獨大 vs 大教大

試合前、大教大の入口豊監督は、「同じ昇格組として負けられない。そして勝ち点を上積みして後半戦は中位争いに絡みたい。」と意気込みを語った。姫獨大の昌子力監督もニュアンスの違いはあったが、この試合を上位進出のキッカケにしたいという意志は同じだった。

試合は、ともに攻撃的な姿勢を崩さない見応えのあるものになった。開始早々の6分、姫獨大は、MF 23 田中誠のスルーパスにFW⑩沈修輔が反応。右足を振り抜き先制点を奪う。大教大もトーンダウンする事なく、反撃。軸になったのはFW 22 佐藤和馬。巧みなポストワークとライン裏への飛び出しで攻撃にリズムを与える。ただ、フィニッシュが決まらない。

大教大の反攻に耐えた姫獨大は、後半17分に貴重な追加点をモノにする。沈修輔が自身で得たPKを冷静にゲット。決定力の差で2-0と点差が広がる。大教大も終盤3トップにして強引に押し込むが、89分にFW⑨森原慎之佑が1点を返すのが精一杯。中位に喰らいついていたのは姫獨大だった。

（文：サッカーライター ハヤシ ヒロヒサ）

姫獨大 2 $\begin{Bmatrix} 1-0 \\ 1-1 \end{Bmatrix}$ 1 大教大

得点（アシスト）者	得点（アシスト）者
6分 ⑩沈（23 田中）	89分 ⑨森原
62分 ⑩沈	

第2試合 関西大 vs 同大

関西大 2 $\begin{Bmatrix} 1-0 \\ 1-0 \end{Bmatrix}$ 1 同大

得点（アシスト）者
89分 ③飯田（28 阿部）

上位には位置するものの、ここ数試合の公式戦で冴えが見られない両チーム。この試合で、復調の兆しが見えたのは関西大だった。

先制パンチは4分。DF・6・佐藤祐起が右サイドを挟んでクロス。ファーで待ち受けていたFW・19・金園英学が、ヘッドで合わせる。シュートコースは殆ど無かったが、上手くGKの頭上を狙ってゴールを決める。

先制されると脆さが出る同大。この試合も反撃の意欲は伝わるが、なかなか攻め切れない展開が続く。相手のミスから得た数度の決定機にもゴールネットを揺らせず選手の表情には焦りが目立つ。

関西大も内容が素晴らしかったとは言いが、ディシプリンはしっかりしていた。クロスやCKのボールは必ずファーサイドを狙い、流れの中では丹念にサイドチェンジを繰り返した。即興的な技は見事だが、狙いを徹底出来ない同大との差が出た部分である。

80分には、関西大DF・2・田中雄大が弾丸FKを沈めて、勝負あり。「優勝を目指す。」（関西大・川端秀和監督）ためには、貴重な勝ち点3となった。

（文：サッカーライター ハヤシ ヒロヒサ）

6/15（日） 大阪長居第2陸上競技場

第1試合 関学大 vs 近畿大

運命のいたずらか——。6月7日に行われた関西選手権3位決定戦、関学大vs近畿大。総理大臣杯最後の切符を手にしたのは、準優勝した2部大体大戦の大敗から這い上がった近畿大だった。あれから一週間。同カードとなったこの試合では、悔しさを味わった関学大が接戦をものにし、価値ある勝利をあげた。

関学大は勝利に出た。前半は決定機を作れず、後半開始から一気にFW2人を投入。攻撃型にシフトした効果が表れ、14分にコーナーキックから混戦になったところを最後はMF⑤青戸謙典が押し込み決勝ゴールを決めた。試合後、「今日に懸ける気持ちは人一倍あった。でもゴールはたまたまですね。」と青戸。気迫あふれたプレーを見せた関学大が雪辱を晴らした。

近畿大のシュート数はわずか4本。そのうちの3本がFW⑩前田竜太によるものだ。この数字が物語るように守備に人数をかけた関学大に、攻撃陣は完全に抑えられてしまった。唯一孤軍奮闘を続けた前田も、健闘むなしく途中交代。ゴールを決められないまま、試合は終わった。最後尾からチームを鼓舞したGK①高石裕介も「相手の気持ちが強かった。関学に走り負けていた。敗因はそれだけです。」と、肩を落とした。

（文：フリーライター 久住 真穂）

関学大 1 $\begin{Bmatrix} 0-0 \\ 1-0 \end{Bmatrix}$ 0 近畿大

得点（アシスト）者
59分 ⑤青戸

大院大 0 $\begin{Bmatrix} 0-0 \\ 0-0 \end{Bmatrix}$ 0 桃山大

第2試合 大院大 vs 桃山大

スコアレスの引き分け。互いに勝ち点1を分かち合った戦いだった。しかし、「大院大は勝たなければいけなくて、うちは負けなくて良かった試合」と桃山大・松本直也監督が振り返るように、内容では1人少ない大院大が試合を支配していた。前日プロチームと試合を行っていたとは思えないタフなチームだ。大院大は前半途中にMF⑧深作真也の退場で10人での戦いを余儀なくされたが、その後も走り続けた。だが、「まだ立ち上がりで終了間際の時間帯が良くない。」（大院大・藤原義和監督）と課題はある。また主将DF⑥馬場悠が後半に怪我を押して、強行出場。痛みに耐えながらも果敢に攻撃参加し、チームを引っ張った。あとは勝利あるのみ。得点能力の高いFW陣がそろっているだけに、勝つチームへの変貌を待ちたい。

一方、桃山大にとっては数的優位だっただけに厳しい試合だったはず。中盤でのミスも目立ち、前でボールが収まらず、攻めあぐねていた。しかし大院大が放った16本のシュートをゴールに結び付けず、無失点で切り抜けたことは明るい材料だ。攻撃を立て直し、次こそは勝利といきたい。

（文：フリーライター 久住 真穂）